



寄り道のすすめ

須田 亮[†]

Encouragement of Dropping in on the Way

Akira SUDA[†]

昨今、科学技術や学術研究においても短期的に結果を求める成果主義に偏っているようである。目鼻立ちが良く社会的に認知されやすい研究、あるいは産業振興に直接結び付くような研究が重視されているように思われる。これは個人の研究スタイルにも大きく表れている。長期的視点で将来につながるような基礎的な研究を避けて通り、着実に成果の得られるテーマを見つけて、最短経路で効率良く目的を達成しようとするのである。ともすれば拙速に成果を求めがちになってしまう。このような状況に関連して、昭和初期の寺田 寅彦全集(第八巻)に次のようなくだりがあるので紹介したい。

科学者になるには「あたま」がよくなくてはいけない。これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。しかし、一方でまた「科学者はあたまが悪くなくてはいけない」という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後のほうの命題は、それを指摘し解説する人が比較的少数である。(中略)いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かないところへ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくそのだじな宝物を拾って行く場合がある。

頭のいい人は、いわば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのためややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって楽観的である。そうして難関に出会っても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

それで、研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない。きつと前途に重畳する難関を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせっかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。(中略)科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

この随筆は寺田 寅彦の晩年の作品の一つであり、独特の味わい深さで科学者の能力と研究の進め方について述べている。現在のようないんformation・国際化社会が訪れてからは、効率重視に偏り目先ばかりの成果を追い求めがちであるが、今一度先人の言葉に耳を傾けて寄り道するゆとりを持てるようにしたい。

[†]東京理科大学 理工学部 (〒278-8510 千葉県野田市山崎2641)

[†]Faculty of Science and Technology, Tokyo University of Science, 2641 Yamazaki, Noda, Chiba 278-8510